
幻獣の王

夢魔

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

幻獣の王

【Nコード】

N8203P

【作者名】

夢魔

【あらすじ】

神様による暇つぶしという名の悪戯で実行された阿弥陀籤で転生者を選ばれ死んでしまった少女が、その代償としてありとあらゆる伝説上の生物に変身できる悪魔の実を食べ、更には白髪的美少女へと姿を変えられONE PIECEの世界に転生する。原作知識のある彼女の目的はマリントップ上戦争に参戦して奴の目論見を叩き潰すこと、唯一つ。

プロローグ

【Side：ハク】

「……あゝ、不幸だ」

ただ今、私こと『ハク』は雲より遙かに高い空から自由落下中。
武装色の覇気を纏っている為、大したことはないがこの小さな体にビシバシと風が叩き付けられて地味に痛い。

何故こんな幼女の姿で紐なしバンジージャンプも真つ青な事態に陥っているのか。

それを説明するには数分前に遡らなければならない。

「すみません、もう一度言って貰っていいですか？」

「だ・か・ら、貴女には『ONE PIECE』の世界に転生してもらいます。因みに拒否権はありませんので。」

繰り返す日常。

その何時もの学校の帰り道で目の前に不自然に開いたマンホール

があり、避けて通ろうとした瞬間無数の黒い触手が足に絡みつき叫び声を上げる間もなく暗い空洞へと引きずり込まれた。

そして気が付けば、周囲は黒と白のモノクロの世界。

そのまるでだまし絵の様な階段と建造物を彷徨うこと数分、突如現れたのは均整の取れたプロポーションの持ち主だが顔だけが存在しない能面の女性。

彼女が語ったのは、到底信じられない荒唐無稽な話。

女性の上役でもある神の決定で、私は強制的に『ONE PIECE』の世界に飛ばされるらしい。

「いやいやいや、訳が分かりませんって。

しかも拒否権がないって、かなり横暴ですよね」

「そう言われましても、神様が決めたことですからねえ。

貴女は勿論、どのような存在もこの決定を覆すことはできません」

困ったかの様なポーズを取る女性の動きは大変蠱惑的なのだが、顔がないので不気味以外の何者でもない。

それにしてもこの空間、眺めていると頭が冗談抜きでおかしくなりそう。

「まあ、あみだくじに当たってしまったご自身の不運？を恨んで下さい」

「あみだくじっ!？」

「ええ、神様には無限とも言える時間がありますから案外暇なんですよ。」

それでよく暇つぶしと称して様々な悪戯というか企画を立案されるのですが、今回は『サイコロを転がして決まった年代の全ての人物の中からあみだくじで転生者を決めよう!』というものが実行されまして……………」

「選ばれたのが私だと?」

「はい」

何ですか、その理不尽orz

「はあ……………覆せないのなら仕方がないですね。
詳しい話をお願いしますか」

「ええとですね……………」

先ず貴女には前世での名前と姿を捨てて頂きます。その際には、鍛えれば鍛える程強くなれるように限界をなくした新しい身体を用意しますので名前はそちらで考えて下さい。

因みに、貴女と言う存在はあの世界には存在していなかったことになります」

そう言った女性の手の平に浮かんできたのは、思わず抱き締めたくなるような保護欲をかきたてられる可愛さの白髪の少女の立体映

像。

これが私の新しい体ということは……………

「神様ってロリコン？」

「……………次の話に移ります」

スルーしたッ！？

そうか、神様ってロリコンなんだ。

「貴女に与えられるのは神様が特別にご用意された『幻獣王の実』。これにはありとあらゆる伝説上の生物に変身できる動物系ソオンの悪魔の実。

他にもこの体には『見聞色の覇気』『武装色の覇気』『霸王色の覇気』全ての才が秘められますがそれを生かすも殺すも貴女次第。それで、名前は決まりましたか？」

「……………ハク。ハクでお願いします」

安直かもしれないが、見たときに感じた印象をストレートに表現してみた。

「分かりました。

では、御武運を」

女性のその言葉と共に私は再び意識を失い。

気が付けば新しい体で雲の上からの紐なしバンジージャンプの真
っ最中。

そんな場所なら、スカイピアでの冒険譚かとも思っただが如何やら
違うようで下方から数え切れない程の怒号と爆発音が私の耳を震わ
せる。

「は？」

そして遂に視界を遮っていた雲を突き抜けて目に飛び込んできた
のは三日月型の島。

沢山の建造物の中でとりわけ巨大な城の如き建造物にはデカデカ
と『海軍』と書かれている。

「海軍本部、マリنفォード。

エースの処刑………白ひげと海軍の頂上決戦ッ!？」

初っ端から、こんなところに放り込まれるなんて何たる不幸。
というか………

「悪魔の実の能力って如何使うの〜〜っ!!」

能力発動の切欠が掴めていない私は如何したらいいのでしょうか？

第1話 頂上決戦

【Side:——】

『海賊王』ゴール・D・ロジャーの息子であるエースの処刑を巡り世界中の海の猛者達が海軍本部マリンフォードに集結していた。

海軍側は、世界各地より召集された名のある海兵達総勢約10万人の精鋭と50隻の軍艦。更には海賊『王下七武海』と海軍本部最高戦力3人の『海軍大将』。

海賊側は、いずれも『新世界』に名を轟く白ひげ傘下の海賊達総勢43隻。そして大本命の『白ひげ海賊団』船長白ひげ及び14人の隊長達。

攻め入るは、『白ひげ』率いる新世界47隻の海賊艦隊。
迎え撃つは、政府の二大勢力『海軍本部』『王下七武海』。

その誰が勝ち誰が敗けても時代が変わる最終決戦にエースの義理の弟『モンキー・D・ルフィ』と鉄壁の大監獄からの脱獄囚達が加わり混迷を極めることとなった。

そして開戦から約1時間半の死闘を経た頃海軍が大きく仕掛ける。
政府の人間兵器『パシフィスタ』の複数投入、裏では赤犬の目論んだ計画が着々と白ひげ自身へと迫っていた。

だが、それもたった一人の少女の介入によって本来起こる筈だった運命と共に崩れることとなる。

【Side：白ひげ】

「アレが噂に聞く、政府の人間兵器か……………」

だが、ありゃあ七武海の『バーソロミュー・くま』じゃねえか。
人間兵器自体が存在することについてちやあ別段驚きやしねえが、
何故全てくまの姿をしてやがる。

いや、そんなこたあどうでもいい。

今は息子^{エース}の救出が最優先だ。

「……………む、矢張り俺達を湾内に追い詰めて取り囲むつもりだった
な」

マルコの指揮で周りの軍艦をある程度打ち崩せたおかげで完全な包囲は免れたが、縦に挟み撃つことは可能だ。

個体の戦闘能力に開きがあり過ぎる上に、味方に多少の被害が出てもお構いなし。

「己らの犠牲も厭わんか……!!」

後方の敵に構うな野郎共オ……!! 一気に広場へ攻め込むぞオー
ーっ……!!」

「「「ウオオオ……!!」」」

「全隊直ちに氷上を離れろっ……!! 海賊達を決して広場に上げるな
ア……!!」

智将『仏のセンゴク』、まだ何か企んでやがるな。

傘下の海賊達は人間兵器の相手で手一杯、マルコ達隊長格も海軍大將中將と七武海に阻まれて広場に誰一人として上がる事さえできていない。

エースの弟

小僧も大將黄猿に集中的に狙われて八方塞り。
何か因縁でもあんのかアイツら。

「ん、スクアード！」

無事だったか、さっきでめエに連絡を」

「ああ、すいません。オヤツさん！
後方、傘下の海賊団はえらいやられ様だ……！！」

「持てる戦力は全てぶつけて来る……！！
後ろから追われてんなら望む所だ、俺も出る！！こっちも一気に
攻め込む他にねエ……！！」

「そうですね。
おれ達も全員あんにゃ大恩がある。白ひげ海賊団の為なら命も
いらねエ……！！」

そう言つてスクアードが身の丈以上ある獲物を鞘から抜き放つの
を見て再び前を見据えた瞬間、目前を青白い光が通過し一瞬眩んだ
眼を見開くと信じられない光景が。

スクアードが俺の土手っ腹目掛けてその凶刃を突き出し、その刃
が薄皮一枚のところまで止められている。

しかもそれを成したのは全く反応できなかった俺では勿論なく、
青白く迸る電流を身に纏った十かそれを少し過ぎた程度の年齢にし
か到底見えない子供^{ガキ}だった。

【Side：ハク】

「不味い、不味い、不味い……………」

このままじゃ、大将青雉の『氷河時代』^{アイスエイジ}で凍った海面に叩き付けられてスプラッタですよっ！？

原作ではルフィ達は無事だったけど、あれは白ひげ海賊団3番隊長『ダイヤモンド・ジョズ』が凍りついた海から巨大な氷塊を引き抜いたことで空いた隙間に上手く着水したことによって起きた奇跡なのだ。私もそうなる保証はどこにもない。

^{ソオン}動物系の悪魔の実^{ソオン}は明確なイメージさえ持てば変身できると思ってたけど、幾ら試しても全く体に変化の兆しが見られない。

変身可能な幻獣の知識は豊富にあるが、これでは宝の持ち腐れ。

「何か切っ掛けさえ掴めればって、あれは白ひげと確か…スクアード！？」

死へのカウントダウンが聞こえてきた私の眼が捉えたのは、白ひげ海賊団旗艦『モビー・ディック号』の船首に仁王立ちする世界最強の海賊『白ひげ』と傍らに立つ大渦蜘蛛『スクアード』の二人。

彼はこの後、大将赤犬の虚言に惑わされて大好きな父親を自分の

手で刺してまう。

そのショッキングなシーンが目の前で、しかも現実再現されようとしていた。

「……………そんなの認めない。認めてやるものか」

血の繋がりはないかもしれないが本当の親子と何ら遜色ない絆をもつ親子の仲が、正義の為だと踏み躪られようとしている。そう考えた時、頭の中が恐ろしい程クリアになり、曖昧だった『幻獣王の実』に関する情報が脳髓を駆け巡った。

この状況を何とか出来るのは……………

「動物系幻獣種トリトリの実モデル『サンダーバード雷鳥』！！」

変身したのは体長5メートル弱はある巨体に青白い雷を何重にも纏わせた大鷲。

雷鳥の能力の一つ、瞬間的に雷の如き速度での飛行を可能にする『ライトニング雷速飛行』で一条の雷となった私は一息で白ひげさんの眼前へと移動を果たす。

そして、能力を解除し右手に武装色の覇気を纏わせて白ひげさんに突き立たんとする凶刃をギリギリの所で止めることに成功。

「駄目だよ、父親にそんな物騒な物向けちゃ」

そう言った私の声は喧々轟々の戦場にも関わらず妙に響いた。

第1話 頂上決戦（後書き）

■動物系幻獣種トリトリの実モデル『サンダーバード雷鳥』

体長5メートルもある大鷲に変身する能力で、体内に内包されている膨大な電力を放出して攻撃する。

その原典は、カナダ西海岸部やアメリカに先住するインディアン部族の間に伝わる神鳥。

●ライトニング雷速飛行

瞬間的に雷の如き速度での飛行を可能にする技。

第2話 その名はハク

【Side:――】

『海軍本部』のある島『マリンフォード』には主に海兵達の家族が暮らす大きな町がある。

現在住人達には避難勧告が出ており、避難先のシャボンディ諸島からモニターによって人々は公開処刑の様子を見守っていた。各所より集まった記者やカメラマンもまたここから世界へ情報を一早く伝えるべく身構えていた。

そしてたつた今、そのモニター越しに映っている映像に誰もが釘付けになっている。

「――ええ。」

――それが刺そうとしたのは『白ひげ』傘下の海賊団船長――
――新世界の海賊『大渦蜘蛛』!!!!――

「それよりあの男の行動を阻止した少女は一体」

「何であんな小さな女の子が戦場に!？」

そんな彼らの関心の対象は『白ひげ』に反旗を翻した『大渦蜘蛛スクアード』ではなく、その凶行を何処からともなく突如現れて阻止した白髪の美しい少女だった。

【Side：ハク】

「スクアードオ~~~~!!!!」

未だに白ひげを刺そうと大太刀の柄に力を込めるスクアードを押し留めていると、動物系幻獣種トリトリの実モデル『不死鳥』の能力者、白ひげ海賊団1番隊隊長マルコさんが再生の蒼い炎を身に纏いながら猛然としたスピードで飛来する。

「……………く……!!!!」

「ふう」

そのままの勢いでマルコさんがスクアードを取り押さえるのを確

認して、取り上げた大太刀を彼の手の届かない所へと投げ捨てる。

やれやれ、最悪の事態は免れたけどこれから如何しようかな。

これで多少は話の流れは変わってくるだろうし、不慣れな見聞色の覇気では把握しきれない程の視線もヒシヒシとを感じる。

「うるせエ!!!」

こうさせたのはお前らじゃねエかア!!!」

うわゝ、可也の力で顔面を甲板に叩き付けられてたのに元気だね
ゝ。

「こんな茶番劇やめちまえよ!!!」『白ひげ』!!!」

もう海軍と話についてんだろ!?

お前ら『白ひげ海賊団』とエースの命は助かると確約されてんだ
ろ!!!?」

「!」

「何言つてんだ!?!という事だ!?!?」

「おれア…知らなかったぞエースの奴が…あのゴールド・ロジャー
の息子だったなんて…!!!」

おれがアంతに拾って貰った時…!!!おれは一人だった……

!!!なぜだか知ってるよな!?

長く共に戦ってきた大切な仲間達をロジャーの手で全滅させられ
たからだ…!!!おれがどれだけロジャーを恨んでるか知ってるハ

ズだ!!!

……… だったら一言、言ってくれりゃあよかった………!!! エースはロジャーの息子であんたはエースを次期『海賊王』にしたいと思ってる………!!!

——— その時はすでにおれアお前に裏切られたんだ…… エースとも仲良くしてた…… バカにしてやがる………!!! そしてお前にとってそれ程特別なエースが捕まった………!!!

だからお前はおれ達傘下の海賊団43人の船長の首を売り………!!! 引き替えにエースの命を買ったんだ………!!!

白ひげ海賊団とエースは助かる………!!! すでにセンゴクと話はいってる………!!! そうだろ………!!!?

そんな事も知らずにどうだ………!!!? おれ達は………!!! エースの為白ひげの為と命を投げ出しここまでついて来て、よく見るよ………!!! 海軍の標的になってんのは現に………!!! おれ達じゃねエか………!!! 波の氷に阻まれてすでに逃げ場もねエ………!!!」

「ふう………。あ、茶柱」

この人の話長いな。

因みに、お茶を何処から出したとか野暮なこと聞いちゃだめですよ。

「ハア……ハア………!!!」

オヤツさアん………!!!? 本当かよ………!!!」

「ウソだろそんなわけ………!!!」

「言われてみりゃコイツらおれ達しか狙わねエぞ」

白ひげ海賊団を除いた傘下の海賊達に動揺が伝播していく。

これが集団心理の恐いところ。少しでも相手の話しに納得できる部分があり一度でも疑ってしまえばダムに空いた穴から一気に亀裂が広がるように、その者の疑心暗鬼が周りに波及する。

冷静に考えれば過ちに気付き反省するが、ここは戦場でそれも難しい。

これがセンゴク元帥の計算付くなら、智将の名は伊達ではないということだね。

「信じたくなかった…おれア目を疑ったよ……………!!!」

「バカ野郎!!! 担がれやがったなスクアード!!!
なぜオヤジを信じない!!!」

「てめエまでしらはつくれやがって、マルコオ!!!
大体その子供^{ガキ}だって海軍の^{回し者}謀じゃねエのか!!!」

「は？」

そこで私に振りますか、頭に血の上った人はこれだから。

「ちょっと齒を食い縛りなさい」

「何をッ!?!」

私を指差して、まだギャアギャア喚いている馬鹿にキチンと忠告して…………

「頭を、冷やさないッッ！！！」

「ぐおおおおお……………」

……………態と音が響く様に馬鹿^{スクアード}に拳骨一発落としてもう一度沈めた。気絶しない程度に加減した為、痛みに悶絶して甲板を転がり回っている。

うん、視線がいい感じにこちらに集まっているね。

「聞きなさいッッ！！！」

「「「！！！！」」」

「白ひげさんが仲間を売ったと本気で思っている方は名乗りを上げて下さい。私が直々に目を覚まさせて差し上げますから。」

私は白ひげさんと面識はありませんが、この人が本当に仲間を、家族を売る様な人物か如何か貴方方が一番よく分かっているでしょう！

船長を、父親を信じられなくて何が仲間、何が家族ですかッ！！」

「「「……………」」」

「みつともねエじゃねエか！！！！『白ひげ』エ！！！！
おれは、そんな『弱エ男』に敗けたつもりはねエぞ！！！！」

「……………」

「クロコボーイ……！！」

「クロコダイル」

そう、避けられたはずなのだ。

私が余計なお節介を焼かずとも体調が全快だったなら、例え心を許した仲間の攻撃だろうと最強の海賊である『白ひげ』がああ程度の攻撃に反応できない訳がない。

「スクアード……おめエ仮にも親に刃物つき立てるとは……とんでもねエバカ息子だ！！」

「ウアア……！！？」

「バカな息子を——それでも愛そう……」

「……ウグ……！！？」

ふざけんな！！！！お前はおれ達の命を……！！！！」

「——忠義心の強エお前の真っ直ぐな心さえ……闇に引きずり落としたのは……一体誰だ」

「……海軍の……反乱因子だ……お前を刺せば部下は助かると……！！！！」

赤犬、サカズキ大將は『絶対的正義』を旨とする海軍の中でも、一際苛烈・過激に正義を徹底する硬骨漢。

その思想には幾分の揺らぎもなく、たとえ民衆や味方の海兵であつても自身が『悪』と見なせば容赦なく始末する。

そんな奴が海賊に対して結んだ口約束を守るはずがない。

新世界の海賊なら、それくらいの情報を知っているだろうに。

「『赤犬』がそう言ったか…お前がロジャーをどれ程恨んでいるか…それは痛い程知ってらア…」

——だがスクアード、親の罪を子に晴らすなんて滑稽だ…エースがおめエに何をした…！？

仲良くやんな…エースだけが特別じゃねエ…みんなおれの家族だぜ…」

「……！」

「まったく……衰えてねエなアセンゴク……！！
見事にひっかき回してくれやがって…」

「ただど赤犬の策略は防いだし、海賊側に原作程の混乱は見受けられない。」

「後は……」

「白ひげさん、左方の氷の壁をお願いできますか？
ご老体に両方は酷でしょう？」

「グラララ……吹きやがるな、小娘が。
だったら、おめエの力を見せて貰おうか」

「勿論です。」

動物系幻獣種トリトリの実モデル『鳳凰』」

「幻獣種だとッ!？」

驚くマルコさんを尻目に、球状の真紅の炎に包まれながら空中へと飛び上がる。

そして炎の殻を喰い破って出現した私の姿は五色絢爛な色彩で羽には孔雀に似て五色の紋がある巨鳥。

「『ソウギョクエン蒼玉炎』!!!」

五尾の内、青く光る尾がサファイアの如く輝きだし嘴から球状の蒼い炎を撃ち出す。

それは大将青雉によって巨大な氷の壁に直撃し、対象が氷であるにも関わらず着弾地点から燃え広がって一瞬で水には戻ることなく蒸発した。

「海賊なら信じるものはてめエで決めろオ!!!!!!」

反対側では白ひげさんがグラグラの実を用いて当然のことながら

氷壁の破壊に成功していた。

これで海賊達に退路ができて誤解も解けるでしょう。

「よいしょっと。」

流石ですね、白ひげさん」

「グラララ！！小娘もやるじゃねエか。
それで、何が目的だ？」

「エースさんの救出」

「名は？」

「ハク。フリーの海賊、ハクです」

第2話 その名はハク（後書き）

■動物系幻獣種トリトリの実モデル『フエンファン鳳凰』

五色絢爛な色彩で羽には孔雀に似て五色の紋がある巨鳥『鳳凰』に変身する能力。

五色の紋、それぞれに対応した炎を操ることができる。

●ソウギョクエン蒼玉炎

球状の蒼い炎を発射し、それが着弾した対象物の上に燃え広がり任意のタイミングで消せる技。

第3話 男の花道

【Side：ハク】

「氷の壁がなくなった……………！！」

「…この軍艦も使えるぞ……………！！」

「これじゃ…いつでもおれ達逃げられる……………！！」

「「「！！！！」」」

「やっぱりウソだ！！」

海軍の作戦だったんだ、畜生オ……………！！」

私と白ひげさんが、津波で出来た巨大な氷壁を消滅させて海賊達に退路を与えたことで『白ひげ海賊団』に向けられた疑念を払拭できた。

本当なら両壁とも私が燃やして白ひげさんの負担を減らしたかったけど、彼自身が動くことでしかこの局面は乗り切れなかったと分かっていたからせめて片方だけでも思ってたんだけど上手くいったよかった。

海賊側の私に対する警戒も薄れたみたいだし、万々歳だね。

「さて次は…うにヤツ！？」

「この娘の名はハク、味方だア！この俺が保証する！！
それでも文句の有る奴ア、俺に言えッ！！！！」

「「「ウオオオオオオオオッ！！！！」」」

次の行動に移ろうとした瞬間、白ひげさんに猫の如く首根っこを掴まれてマリンフォード中に聞こえそうな大声でコイツは味方だと大々的に宣伝された。

っていうか皆さん、雄叫びを上げるタイミングおかしくないですか！？

「白ひげさんも、やるならやるで事前に言ってください！鼓膜が破れるかと思いましたよ。」

…体、どれくらい持ち堪えますか？」

「！！……舐めるなよ、ハク。」

「若エ命を未来に繋げるだけの力は残ってらア」

矢張りこの人は此処で時代に『決着^{ケリ}』をつける気だ。

できることならエースさんだけじゃなくこの人も助けたい。たとえ情けない話、私には白ひげさんを止めるだけの言葉もなければ覚悟もない。

だっ たら…

「その最期の男の花道、露払いは私に任せてもらいますッ!！」

それが今の私にできる唯一の事。

【Side:——】

白ひげ海賊団の旗艦『モビー・ディック号』から飛び降りたハクは身に纏った白に染まった和服の裾をはためかせながら氷上に華麗に着地。と同時に、先程とは正反対の荒々しい進軍を開始する。年端もいかぬ少女の一步一步が氷の大地を砕く様は中々にシユールなものではあったが。

「広場にや上げんぞ『白ひげ海賊団』!!!」

「うわあああ!!!」

「ジョン・ジャイアントだア！！！」

それを阻む形で立ち塞がったのは、海軍中将『ジョン・ジャイアント』。

帽子・服共に赤を基調とした制服を纏い、巨大な日本刀を帯刀した男の声が広場全域に響き渡る。

「巨人族…邪魔ですね」

「例えば子供であろうと、ここを通すわけにはいかんだア！！！」

相対する少女と巨人、その姿は言い表すなら正に蟻と象に他ならない。しかし、ハクは自分に向かって振り下ろされた刃を避けようとはしなかった。

そうして起きた激突は衝撃派を発生させ氷塵を巻き上げる。

白ひげを除いた誰もがその光景にハクの『死』を疑わなかった。

だが、最初に違和感に気づいたのはジョン・ジャイアント。刀を引き戻そうとしても全く動かないことに得も知れぬ漠然とした不安と疑念が彼を襲う。

「動物系幻獣種ヒトヒトの実モデル『鬼^{オーガ}』」

それは現実となり、氷塵が晴れて現れたのは日本刀の刃の部分を素手で掴んだ少女。その手から血が一滴も流れていないところを見ると掠り傷一つついていないことが分かる。

思考停止状態から復帰した巨人が次のアクションを起こそうとするが、『鬼^{オウガ}』の名の通り頭に二本の角を生やしたハクは慌てることなく空いていた右手で敵の得物を上へと弾き飛ばした。

「バ、バランスが……！？」

日本刀を離さなかったことと、巨体故の重心の高さが災いして全体が後方へと傾いてしまう。

それをハクがみすみす見逃す筈もなく、一瞬の溜めの後ジョン・ジャイアントの腹部を指して文字通り飛び上がる。

「押し通らせてもらいます！『鬼氣^{キキイッ}発^{バツ}』！！」

「がアアアアアあぁ！！？」

目標の鳩尾へと叩き込まれた純粹な力は巨人を吹き飛ばし、ジョン・ジャイアント海軍中將は派手に回転しながら何度も氷上をバウンドして広場へと突っ込んだ。

その一連の流れに啞然とする面々を余所にハクは「これで五割か」などと呟いていたが、知らぬが仏とは正しくこのことである。

「巨人族、海軍中將を一撃で…信じられないよい」

「ああ、それに悪魔の実の能力は一人に一つの筈。だが詮索は後だ」

「オヤジ……」

「おれと共に来る者は命を捨ててついて来い！！
行くぞオ～～～～！！！！！！」

「オヤッさんとハクのお嬢に続けエ~~~~!!!!」

海軍の策略は失敗。しかしてその行為は海賊達の怒りに火をつけるだけに止まらず、**図**らずもハクの立ち位置を印象づける結果となった。

そして遂に『白ひげ』自身が動き出し、頂上決戦は新たな局面を迎える。

「——！すげエな、アイツ！！」

「……く！……とにかく今はエースだ！！！」

「ルフィ君！」

『白ひげ海賊団』とは別口で兄エースの救出を目指すルフィもハクノ規格外ぶりを驚愕の眼差して見詰めていたが、直ぐに我に返って元『王下七武海』魚人海賊団船長ジンベエの制止の声を聞かずに移動を再開する。

「ジンベエ！！アレをご覧ナサール！！
いつの間にか敵は全員、広場へ上がってるわ！！」

「んん……！！悪い予感しかせんわい。
——だがオヤジさんが動いた！！もう考えとる場合じゃない」

それをジンベエに続いて追いかけるのはカマバツカ王国の女王にして、革命軍の幹部『エンポリオ・イワンコフ』。相変わらずの巨大な顔面で周りを威圧しながら突き進む。

「それにしても、あのハクガールだったかしら。
あの力は半端ナツシブルね。ジンベエ、ヴァナタ知ってる？」

「生憎と初見じゃ。
じゃがあの娘、悪魔の実の能力を二つ使った。只者とは思えん」

『白ひげ海賊団』と一戦交えた海軍本部最高戦力と称される3名の大將達は、海楼石により悪魔の実の能力を封じられ『ポートガス・D・エース』と海軍元帥『センゴク』、ルフィの祖父にして海軍の英雄『モンキー・D・ガープ』が居る処刑台の真下に用意された椅子に座っていた。

「あんの小娘エ、わしらの作戦の邪魔しおつて」

海軍元帥センゴクが立案した作戦を成功させる為に水面下で暗躍していた大將赤犬・サカズキは『白ひげ』に致命傷をどこるか手傷を負わせることもできなかったことに憤慨し、怒りの矛先を『鬼』となったその豪腕で次々と海兵達を戦闘不能にしていく少女・ハクへと向ける。

「オー……仕方ないよオー、サカズキ。」

こっちの爪が甘かっただけの話だからねエ……」

「黙っちよれ、ボルサリーノ!!」

頭に血が上った赤犬の神経を間延びした口調で逆撫でするのは大將黄猿・ボルサリーノ。

軍務には忠実でシビアな面を見せ辛辣な発言も多いのだが、普段は如何にも人の気に障る発言をする人物である。

「おいおい、喧嘩しなさんなって。

問題なのはあれ程の力があって、何故今のタイミングであの可愛い嬢ちゃんが表舞台に出張ってきたかでしょうよ」

そんな二人を諫めながらも、突如現れた少女を冷静に分析するのは普段はマイペース且ついい加減で『だらけきった正義』をモットーとしているぐうたらな男、大将青雉・クザン。

『白ひげ』の為に処刑台への道を切り開いていくハクは革命軍の幹部から海軍の大將まで、良い意味でも悪い意味でも様々な陣営からの注目を浴び、彼女はこの海賊と海軍の頂上決戦で確実にその名を上げていった。

【Side：ハク】

「『ヒヤッキヤコウ百鬼夜行』……！」

「『……！……！』」

一撃一撃がルフィさんの『ギア3』から繰り出される技と匹敵する威力を誇る『キキッパツ鬼氣壹発』より多少威力が劣る拳打の連撃『ヒヤッキヤ百鬼夜行』で進路上の敵を薙ぎ倒して征く。

人を傷付けることに躊躇いはないと言えは？になるが、戦うことを躊躇して大切な人を失った時後悔するのは私自身。

だから………

「容赦は一切しません！
ですから……帰りを待つ家族がいる方は下がりなさい……！」

第3話 男の花道（後書き）

■動物系幻獣種ヒトヒトの実モデル『鬼^{オーガ}』
頭に2本の角が生えた鬼に変身する能力で、皮膚は竜の鱗の如く堅く、傷を付けられても瞬時に回復する。ただし、多少筋肉質になるものの、見た目は殆ど変わらない。

●鬼氣^{キイツ}発^{パン}

ルフィの『ギア3』から繰り出される技に匹敵する『武装色の覇気』を纏った拳打。

●百鬼^{ヒヤツキヤコウ}夜行

『鬼氣^{キイツ}発』より多少威力が劣る拳打の百連撃。

第4話 風精王（前書き）

自業自得ですがブランクが長かったので皆様に満足頂けるものが執筆できたのか不安ですが、宜しければご覧下さい。感想、待って
ます。

第4話 風精王

【Side：ハク】

一体何処から湧いてくるのか、幾ら鬼オーガの腕力で殴り飛ばしても次から次へと向かってくる海兵達。軽くホラー映画を疑似体験しているみたいなんですけど。

「「「わああああああっ！！！！」」」

「纏めて、吹っ飛ばえええっ！」

「「「ぎゃああああああ！！？」」」

「全く、切りがないですね」

ライフル又はバズーカを撃ち放ちながら馬鹿正直に突っ込んでくる海兵の群を武装色の覇気を纏った拳打『鬼キキッ気ッ発バツ』で一網打尽にする。銃機の攻撃が直撃した程度では傷一つ付かない肉体とはいえ痛みを感じない訳ではないし、こつも集中砲火を受けては碌に前へと進めやしない。

やれやれ……………どうやら海軍側に要注意人物として認識された弊害がここにきて表れたようで。

「苦戦してるようじゃねエか、おい」

「白ひげさん。……へへ、そう見えますか？」

「まだ笑ってられんなら上等だア、小娘。デカいのぶちかますから手伝いな」

「！………了解。——スウ」

白ひげさんが長刀ながなたを持った右手とは逆手さかて、左手に力を集中させているのを目の当たりにして思考を切り替える。

そうだ、ここまできて何を躊躇し足踏みする必要があるというのだろ。運が悪かったと片付けるには余りに理不尽な神の悪戯に巻き込まれた結果だけど、変えたい未来があつて、今の私にはそれらを成すだけの力がこの身に宿っている。なら、突っ走れるところまで、立ち止まることなく突っ走る。

「——！！！」

鬼オウガと化したことで強靱となつた肺に許容量限界まで空気を取り込み、衝撃派として解き放つ。と同時に空間さえも破壊する白ひげさんの地震能力も発動し、2種類の波動が互いを喰い合いながら膨大な力を内包した化け物へと成長していく。

「止まらねエ！？うわっ！！」

「やっちまえオヤジイ！！ハクのお嬢～～！！」

「処刑台に届くぞ！！！！」

「行け！！ぶっ壊せエ～～！！！！」

悲鳴と声援が入り交じる戦場を凄まじい轟音を上げながら破壊を撒き散らす権化はエースさんの居る、海軍元帥センゴクが陣取る処刑台へと迫る。原作通りなら三大将が防いでしまっただろうけど、腹に重傷を負わなかった白ひげさんの力と私の鬼の力オーガを融合させた合体技、名付けて『鬼震砲キシンポウ』ならあるいは通るかも。

「よっしゃアア！！！！」

「町が！！！！」

「だが、処刑台には当たっていない！！！！」

「何で逸れたんだ！？」

「とか、期待してたんだけどやっぱり高望みし過ぎたかな？」

「『三大将！！！！』」

私が言うのもなんだけど、あの三人本当に規格外だね。あの威力の攻撃が直撃したのに、服に汚れすら着いてないんだから。結局、私と白ひげさんの一撃は数十名の海兵を戦闘不能にしただけで、関

係のない建造物を無闇に崩壊させてしまっただけ。

寧ろ弁償しろって言われなにか心配だ。この世界の貨幣の持ち合わせなんて皆無だし。ま、正面から受け止めずに逸らして対処した彼らの責任ということで勘弁して貰おう。

【Side:——】

狙ってやった訳ではないが、ハクにその力量の高さを再確認させた三大将だったが、実は『鬼震砲^{キシンハウ}』の威力には戦々恐々としていた。

「オー…手が痺れちゃったよオー」

「俺もだよ。大体、さつさと包囲壁張らねエからだ」

「元はといえば、お前の氷のせいじゃろうがい!!」

しかし海賊達をこれ以上調子づかせない為だけに、一瞬だけ心に抱いてしまった畏れを周囲に悟られないよう隠し切ったのだ。ただ、背後の海軍施設が被った甚大な破壊の痕だけでも下位の海兵達に伝播した恐怖は相当だったようで、及び腰になっている者が多数出てしまっていた。

「おらア！腰が引けてるぞ海兵さんよオっ！！」

「オヤジとハクのお嬢の力にビビってやがる！！！」

「一気に畳み掛けるオっ！！！」

赤犬が仕掛けた姦計に対する憤怒が大攻勢に傾く海賊達に良い意味で拍車を掛け、このまま処刑台まで簡単に辿り着けるのではと淡い期待を彼らに抱かせる。混乱に乗じて前進していた麦わらのルフィが長く伸ばした手で広場の縁を掴んだ時、遂に智将の渾身の策が発動してしまう。

「何だ！？」

「囲まれた！！！」

「何のマネだアーーっ！！」

次々とせり上がる地面が凍り付いた湾内を取り囲み、ネズミ一匹の侵入すら許さない強固な城壁となる。勿論、海賊側も怯まず壁に

向かって超重武器を振り下ろしたり、重火器の引き金を引くが結果は惨々たるもの。更には、壁に設けられた隙間から覗く砲口に狙われている事に気付き、焦りが罵詈雑言となって飛び交う始末。

「くそ！ビクともしねエ、相当な厚みだこの鋼鉄！」

「さっきから言ってた『ほういへき包囲壁』ってのは、この鋼鉄の防御壁の事か！……！」

「戦わねエ気かア！？海軍……っ……！」

これで詰みかと思われたが、海軍側にも予想だにしていなかったアクシデントが発生していた。

「おい、どうなってるんだ！！完璧に作動させる……！！」

「それが、包囲壁があのおースの巨体を持ち上げきれず……！どうやら奴の血がシステムに入り込みパワーダウンしてる模様で……！」

声を張り上げるセンゴク元帥の問いに戸惑う海兵達の視線の先には巨人族をも凌駕する肉体を持つオースが包囲壁の一つに覆い被さるように倒れてる。戦争序盤にて友であるエースを助ける為に孤軍奮闘しながらも、処刑台まであと一步のところまで力尽きた彼の決死の行動が実を結んだのだ。

しかし、その勝機に繋がる奇跡をも嘲笑うかのように、非情なる

命令が大将赤犬に下された。

「締まらんが、始める赤犬！！」

「『流星火山』」
りゅうせいしかざん

「氷を溶かして、足場を奪え！！！」

赤犬が悪魔の実の能力を用いてマグマの塊を火山の噴火を再現するかのよう天高く打ち上げ、曇天を紅く染め上げる。そして不気味な静寂の後、流星の如き凄まじい勢いで拳状に変形したマグマが湾内に広がる氷めがけて降り注ぐ。圧倒的な自然の力を前に、海軍を含む大多数の人間が圧倒され、体は硬直する。

このまま氷の大地に激突すれば被害は甚大。出来ることなら防ぎたいが、その手段を持ち合わせていない海賊達は防御、又は回避行動を取り始め、幾人かが命すら諦めかけたその時、戦場には似つかわしくない澁刺とした声が響く。

「だが、しかし！そうは問屋がよろさないんだよ！！」

「またしても邪魔する気がア！！小娘エっ！！！」

「愚問だね！私はアンタを必ずぶっ飛ばす！！」

滞空するその影を捉え激昂する赤犬に見事な啖呵を切り返すハクだったが、その姿は大変可愛らしくなっていた。元々小さかった体

は更に二周りも縮み、肌は薄らとだが緑色に髪はライムグリーンに染まって、瞳は翠玉の輝きを湛えている。特徴的な尖り耳はピコピコと上下に動き、和服は消え裸体が晒されているがいやらしさは全く感じない。

「動物系幻獣種ヒトヒトの実モデル『シルフィード風精王』。世界に遍く吹き荒ぶ我が風を、何人たりとも阻むこと敵わず!!!」

第5話 竜巻警報発令（前書き）

書き直すこと数回、やっと完成しました。正直、オリジナルの展開を書くのは思っていた以上に難しく、読んで違和感を感じる方もいらっしゃるかもしれません。

第5話 竜巻警報発令

【Side：ハク】

三大将に『鬼震砲』^{キシンホウ}を防がれて直ぐ、そろそろ包囲壁が発動するタイミングだと踏んだ私は、この後に控えている筈の大将赤犬による殲滅攻撃に対して『風精王』^{シルフィード}への変身を選択した。

まあ、和服が掻き消えた時には流石に慌てたけど。実はこれ、薄緑色に染まった風の膜がまるで水着みやいに身体を保護してくれてるんだよ。要するに私は声を大にして言いたい「裸じゃないからね！勘違いしないように！！」と。……………すみません、恥ずかしさの余り暴走しました。

さて！赤犬に対して大見得も切ったことだし、後は曇天を突き抜けて炎上しながら迫る流星群をつ！！？

「女子供に手を上げるのは気が引けるんだが、これ以上こっちの脚^{シナ}本を引っかき回されちゃ困るのよ。だから、餓鬼のお遊びはここまでお嬢ちゃん！アイス塊^{ブロック}『バルチザン』両棘矛^{バルチザン}！！」

瞬間移動したかのように突如現れた青雉は、空気中の水分を自然系『ヒエヒエの実』の氷結能力で殺傷力の高い氷の矛へと練成。実体を持った幾つもの脅威が、私の体を刺し貫かんと迫る。全て喰らえば無力化されるどころか、命を失いかねないオーバーキル。

まあ、こんだだけ邪魔して怒るなど言う方が無茶だろうけど、仕掛けてくるなら真正面から正々堂々と迎え討って打倒するだけだ。

「三大将ともあるう御人が、年端もいかぬ子供にちよつと大人気ないんじゃない？」

それに、こつちだって遊びでやってんじゃないんだよ！ウインド
シールドスパイラルガスト
盾『螺旋陣』！！」

私の呼び声に応えた風が幾重にも螺旋を描き、掘削機ドリルの如く高速回転。直線にしか動けない氷の矛は、接触した部分から幾千幾万幾億と微塵に切り刻まれ、粉雪となって戦場に降り注ぐ。因みに、奇襲を仕掛けてきた本人はというと既に距離を取っている。

青雩の目的は赤犬の『流星火山』の邪魔をさせない事。時間稼ぎをして、あわよくば私を排除する腹積もりだらうけど………お生憎さま、付き合つてやる気なんて毛頭ない。

「あらら、風を操るなんて自然ロキアの領分でしょうに。ちよつと反則じゃない？」

「お互い様、って言いたいところだけど。私自身、異常だってことは自覚してる。

だから退ひくなら今の内だよ！ウインド刃ブレイドエアースラッシュ『鎌鼬』！！」

この動物系幻獣種ヒトヒトの実モデル『風精王』シルフィードの能力は、生み出した風を身体の一部かの如く自由自在に操作する事。

さっきの啖呵はただの誇大表現で、向こうが過大評価してくれれば、それだけこつちも組みし宇易くなるかもと踏んだだけの話。攻

撃力という点では自然系の能力者と張り合えるけど、単純な物理攻撃に対しての反則と言っても過言ではない無敵体質にだけは敵わない。

防御技『螺旋陣』スバイラルガストで消費した分の風を再び補給して、風の刃を連

続で放つ。青雫は避ける気が始めからないようで、風の斬撃を食らって身体を引き裂かれながら『両棘矛』バルチザンを撃ってくる。尤も、こっちは直撃する訳にはいかないので、必死に回避しながらだったけど。

「どうやら、物理攻撃は効くわけね」

「あくまで、動物系ですから」

「……………」

風と氷の刃が無尽蔵に飛び交う中、溶岩の塊が轟音を上げながら、あっさりと私達の真横を通過していく。邪魔をすると言っておきながら何のアクションも起こさなかったのを見て、青雫が怪訝そうな顔をする。

「あらら、てつきり邪魔してくると思ってたけど？」

「三大将相手に目を離すのは命取りでしょ？」

ほんと、どの口が言っただか。目を逸らした瞬間、仕掛ける気満々だった癖に。

「…………何か企んだな」

「ご明察、もう手遅れだよ」

時間稼ぎしてたのはお互い様だったってこと。此処に飛ぶ前に種は仕掛け済み、誰にも止められない。

「芽吹く時は今！ウインド種^{シード}『竜巻警報^{メイルストリーム}』！！」

【Side:—】

ハクが^ネ大空で一言そう呟いた時、地上にて異変が起きていた。
海軍本部科学部隊隊長である『戦桃丸』が指揮する20体以上の人間兵器『パシフィスタ』の内、数体の足元で急速に風が渦巻き始

める。間もなく渦は竜巻へと成長、鋼鉄の身体を持つパシフィスタを空の彼方へ攫わんと、更に力を増していく。

「どわア！何だ、この風！！」

「今この戦場で、こんな事できんのはハクのお嬢だけだろ！くっ、俺達まで飛ばされそうだア！！」

竜巻発生時にパシフィスタと対峙していた海賊達は、流石新世界で名を馳せる強者だけあって辛うじて巻き込まれていない。もしかしたら、白ひげの『グラグラの実』の脅威を常日頃体験してきたお陰で、突発的な自然災害に対する防衛本能が身に沁みていた可能性も捨てきれないが。

「風速、風圧、共に増大。耐久限界を突破」

人間兵器と呼ぶにふさわしい腕力と握力で、周囲の建造物又は氷の地面を掴み持ち堪えていたパシフィスタ達だったが、彼ら自身を支えていた物が外的要因から加えられる力に耐え切れず圧壊。海賊船や軍艦の残骸、持ち主を失った武器等と一緒に、計7体のパシフィスタが黒いサイクロンの中へと引きずり込まれていった。

戦場^{いくさば}に出現した7柱の自然災害は不規則な軌道を描きながらも、それぞれが赤犬が放った複数の『流星火山』へと向かっていく。

「「「……………」」」

殆どの人間が呆然と、戦慄と共に上空を見上げる中、無慈悲なる風の顎門あぎとが燃え盛る炎を咬み砕いた瞬間、曇天すら明るく照らす大輪の花火が咲乱れた。

【Side：ハク】

耳をつんざく様な爆音が立て続けに響き、濛々と立ちこめ黒煙が視界を奪う。このような状況で、私は能力で身体を保護し、見聞色の覇気で周囲にアンテナを張り巡らせながら一息付いていた。

私がやった事といえば、割と単純明快。『風精王』シルフィードに変身すると同時に、生み出した竜巻の元となる『種』シードを地上に向けて大量散布後は青雉と戦いながら並列思考で操作し、パシフィスタの居る方向へ移動させただけ。

わざわざ赤犬を挑発したのも、警戒の目を空に向けさせたっかた為。というのも、種は脆くちよつとした衝撃で霧散してしまうから。

（実際、蒔いた内の9割は無駄になった）

仕上げに、わざと阻止が失敗したと見せかけて油断を誘い、仕掛けた種を竜巻へと急成長させたという訳。赤犬の、引いてはセンゴク元帥の策の邪魔ができる上に、口からビームを吐く人間兵器も倒せる。まさに一石二鳥。

そろそろ、この黒煙も晴れる。次の一手を打ちますか！！

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8203p/>

幻獣の王

2011年9月21日14時06分発行